



# 勉強法を知らない子供達 ⑪

③生徒 「テストのとき、時間が気になって急こうとするんですが速く読めません。いつも時間が足りません。」

回答 「速く読んで速く解く練習をした方がいいよ。」

コメント これは完全に不毛である。

●世の中の大人は、教師も親も、これまで述べてきたような無意識の前提を備えていない子供達にひどいことをいう。速く読むための訓練の仕方、その続け方を示すこともなく、何より読むとはどういうことか明確にすることもなく自分の狭い体験から思いつきのアドバイスをする。大体、本番で速く読もうとしても無理で、速く読める力をつけることがこそが大事。速く読む力がついたから、読むのが速くなるのである。



●さて、次の英文と表をじっくり読んで。

① No one /of us/ can cut ourselves off /from the body /of the community/ to which we belong./

② We are indirectly dependent/ upon the labour /of others/ for all the necessities/ and comforts /of our lives./

③ It should not be possible /for us/ to enjoy them/ without giving something/ in return./

●	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
●	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
●	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
●	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
●	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50

●これは、高校生の英語の構文というテキストの英文とそのチェック表の記入例である。授業では、これより長い英文を含めて四十問を構造をとりつつ正確に訳す訓練をする。そのあと、生徒は、各自、音読と訳す訓練と暗記にとり組む。その回数をチェック表に記入していくのだが、その表は、次のようになっていく。横の二十は回数。一回終わるごとにマーカーを塗って二十回やると、右端までマーカーで埋まる。二十一回目からは一つずつ○をつけて行き四十回やると○が二十個。四十一回目から六十回目は、もう一つ○をつけていき、六十回やると○が四十個。

●四十個の英文(五行から十行ぐらい)を音読六十回、訳六十回、暗記六十回やるのが目標。これぐらいやると、いや、音読四十回、訳四十回、暗記二十回ぐらいやると、まず学校の教科書の初めての英文でも見た瞬間に訳せるようになる。勿論、誰でも。しかし、なかなか全員は動かせない。生徒が誰にもいわれたことがないからであり、勉強の仕方や頭の使い方について

真剣ではないから受け入れてくれない。で、毎時間毎時間言い続けることになる。百人いたら、百人伸びる方法。しつこくしつこく言い続ける。(以下、次号)

(小林)

④この英文は有名な文章で、そのまま載せましたが、文法的には No one は誤りで None で訂正して教えます。

## 模試の解き直して必要?

受験生の皆さんは模試の解き直しを行っていると思います。受験生ではない生徒も模試を受ければ解き直しをしないと言われます。さて、タイトル通りの質問ですが、模試の解き直しが必要だと思いますか?

必要だと思う理由を上げられる人はそれでいいでしょう。必要だと思う理由がない人は、なぜ解き直しをしているのですか? やれと言われるからやっているのかもしれないですね。ただそれではせっかくの時間をかけた模試と、解き直しが無駄になってしまいます。今回は模試の解き直しについて考えてみましょう。

まず結論から言うと、解き直しは必要です。だから皆さんにもお願いしています。では、なぜ必要なのでしょう。それを考える前に「模試とは何か」から考えてみましょう。

模試、模擬試験のことですね。

入学試験の予行練習の役割を担っています。普段の学習の成果を試す場面です。普段の学習は基本的に項目ごとに学習していきます。どの問



題集を開いても、章ごとに目標や学習項目が書いてあり、その内容を学習していきます。唯一項目ごとになっていないものが、過去問題集です。しかし、過去問を解くためには一通りの学習が終わっていないとできません。習っていないものが多く出てきて解けないのです。ですから過去問は受験生が中心に利用しています。そこで、模試が出てきます。模試はその時点までで学習した内容から、ランダムに万遍なく出題される傾向にあります。つまり、何が出るかわからない状態で受験するのです。ここが大きなポイントです。定期テストや問題集は、何が出るかわかっている状態で受験します。全く異なるものになります。だから模試だと得点が取れない生徒もいます。もちろん逆に模試に強い生徒もいます。部活に例えるならば普段の練習、基礎練から、場面を設定して繰り返し行う型の練習は全て平日の練習。そして模試は練習試合に相当します。

さあ、そのような模試を受験した後どうしますか。模試を受験して何となくできた、できない。結果が返ってきて、やっぱりこのくらいか、などと感想を述べて終わっていたら、次回の模試も同じような結果になると思いませんか? そして、それを繰り返していたら本番の入試も同じような感じで何となく終わってしまうでしょう。そうならないように解き直しをするのです。普段の練習ではできていたことも、試合になるとできなかつた。緊張感や暑さが影響するということもあります。原因は様々ですが、なぜできなかったのか? まずはそれを考えましょう。そして次に同じような場面が来たらしっかりとできるようにする。そのための反省です。模試も同じ

です。反省無くして次の成長はありません。しかも普段から練習試合ばかりはできません。たまにある練習試合を有効に利用しなくては強くなれませんね。

具体的な模試の解き直しの仕方などは普段指導されていると思いますので省略しますが、自分の解き直しの仕方、そしてそれを普段の学習につなげることをもう一度見直して、次回の模試に活かしませんか？

（松永）

### 守るべき記憶

「今世界では自国第一主義が台頭し、国家間の排他的、対立的な動きが緊張関係を高め、核兵器廃絶への動きも停滞しています。このような世界情勢を、皆さんはどう受け止めていますか。」

これは今年の八月六日、広島平和式典において広島市長が述べられた平和宣言の冒頭部分である。さらに平和宣言はこう続いた。

「二度の世界大戦を経験した私たちの先輩が、決して戦争を起こさない理想の世界を目指し、国際的な協調体制の構築を誓ったことを、私たちは今一度思い出し、人類の存続に向け、理想の世界を目指す必要があるのではないのでしょうか。特に、次代を担う戦争を知らない若い人にもこのことを訴えたい。そして、そのためにも一九四五年八月六日を体験した被爆者の声を聴いてほしいのです。」

先日、ドキュメンタリー番組で広島市内の高校生が被爆者の証言をもとに絵を描いている姿に目を奪われた。これまで描かれた絵は十二年間約一四〇枚にのぼるといふ。

原爆投下直後の惨状については、写真や映像がほとんど残っていない。

そんな悲惨な史実を後世に伝えるべく、戦争未体験である高校生が被爆者の証言をもとに、想像を絶する体験と真正面に向き合い、試行錯誤しながらキャンバスに色を重ねていく姿が胸に刻まれたのだ。

実際に経験された方々が高齢になっていく中で、真実を伝えていきたいという思いを胸に活動に参加されている被爆者の胸中も映像から伝わってきた。そして、被爆者のその思いと真摯に向き合い幾度も対話を重ねて絵を描いていく高校生の姿。それらを目にしていると、心の中に何かざわついたものを感じたのだった。

私の祖母も戦争経験者の一人である。妹が病気で長期入院をしていたことなどの諸事情により、祖母と一緒に暮らしていたことがある。中学校の入学式では母の代わりに祖母が出席してくれたこともある。

そんな祖母は、幼い頃から沖縄戦の実体験を時折話してくれたのだった。ガマ（鍾乳洞）での出来事や、食糧の芋を探しに畑を回ったことなど当時の様子を教えてくれた。

その都度口にしてきた「戦争なんてもうやるものではない。」という言葉。何度も聞いたこの言葉が今も耳に残っている。

戦後から七十四年経った今

も、新聞やテレビなどのメディア

アで被爆や戦争について取り上げられている。

地域の自治体や学校現場でも、体験者の方々の話を伺う機会を設けたり、平和学習を積極的に取り組んでいるところもある。事実を後世に伝



えるため、あの記憶を風化させないためでもある。

こうして次世代へと語り継ぐ彼らの意志を受け継いで、我々の後世へと伝えていくこと、平和の尊さを改めて考えていきたい。

（比嘉）

### 身近にいる生きものから得たものは

夏も終わり、ツクツクボウシの声を聞く機会も少なくなってきました。昔はよく蟬取りをして捕まえていたものです。ところが、最近の子供たちは蟬など触れない、触ったことがない、そもそも昆虫なんて嫌いなという生徒が多いと思います。昆虫どころか犬や猫も全くダメという生徒も数多くいます。

私の実家にはいつも動物がいました。昆虫ではありませんが、私の記憶が残る限りでは常に猫や犬、ウサギなどがいました。どうも猫の毛アレルギーだと知ったのは実家を出てからです。アレルギーの原因という意味では動物は決して人間に対して有益だとは言えませんが、動物との生活を通して、私は動物の生と死を学びました。

家で動物を飼っていると、いやでもその動物との別れがきます。その別れが家からいなくなるのか、家の中で死を迎えるのか、その時と場合によって異なります。私の家では出てしまつて帰ってこなくなることもありましたが、家の中で死を迎えることが多かったです。

私が印象に残っているのが、我が家で生まれ、我が家で一生を終えた猫のことです。確か私が小学校に入つてすぐに母猫から生まれ、大学を卒業し実家から離れるころに一生を終えたはず

です。生まれたとき、四つ子だったと思います。小学生になったばかりの私には神秘的な場面でした。家の中でのお出来事としては滅多に体験できないことでした。残念ながら最後まで家で暮らすことができたのは一匹だけだったので、その一匹は家で生まれ、家で最期を迎えました。

小中高大と計十五年ほどずっと一緒にいた動物が亡くなるとき悲しみが大きかったものの、大変貴重な体験をすることができました。そして一つの命の尊さを教えてくれました。

話は戻り、蟬を含めて様々な昆虫、あるいはいろいろな生きものが身のまわりにいた環境は私にとっては大変恵まれていたことでした。当時も今も家から自転車でも二十分から三十分も行けば、夏の夜には蛍が飛び交う場所もあります。さすがに子供のころは蛍を見に行くことはできませんでしたが、同じ場所ですらにはサワガニを捕まえていたことを思い出します。



身近な生きものは豊かな自然だけではなく、生命の尊さなど様々なことを私に教えてくれます。そのような機会を生徒たちにも作ってあげたいですし、貴重な体験の話共有できればと思っています。

（岡本）